

親性向上につながる家族対話とリフレクションを支援する ファミリー・ポートフォリオの開発

Development of Family Portfolio that Support Parenthood through Dialogue and Reflection

佐藤 朝美 Tomomi SATO 愛知淑徳大学 Aichi Syukutoku University	今野 知 Satoru KONNO 株式会社 Switch・ エンタテインメント Switch entertainment Inc.	荒木 淳子 Junko ARAKI 産業能率大学 SANN0 University	佐藤 慎一 Shinichi SATO 日本福祉大学 Nihon Fukushi University
---	--	--	---

<あらまし> 本研究では、親性の向上を支援するファミリー・ポートフォリオを構築する。親性とは、「自己への認識 - 親役割の状態・親役割以外の状態」と「子どもへの認識」から構成される。教育現場で用いられるポートフォリオの機能を援用し、「親性」向上をもたらす活動につながる機能を装備する。日常的に記録を取りためる際にはカテゴリ毎に登録し、定期的に振り返る機能として、「家族新聞」を発行する。一定期間の利用の前後に「親性尺度」の調査を実施し変化を検討する。

<キーワード> eポートフォリオ, 親性, 家族対話, 生涯発達

1. はじめに

子育てや家庭教育を取り巻く環境が変動する中、家庭の教育力の低下が課題に挙げられ、子育てに関する親の学びの促進等、様々な取り組みが行われている(文部科学省 2011)。親が成長するには、「子どもと向き合う」必要があり、親自身が省察的に考える「リフレクションを促す家族対話」が重要であるという(Thomas 1996)。筆者らは、子どもの制作物を記録・観賞することに特化した“ツクルミュージアム”の効果を検討し、アプリの使用が家族対話を促し、「親性」の一部の向上に寄与している可能性を見出すと同時に、親によって活用時の意識や取り組み方の違いがあるという課題も挙げている(Sato et al. 2014)。

2. 本研究の目的

本研究では、親としての成長を促すことを念頭に、ファミリー・ポートフォリオを構築することを目的とする。支援する親の発達や成長は、「親性」という概念で捉えることとする。「親性」とは、「母性と父性とを統合した性質で、親が自分の子どもを養育しようとする性質」と定義されている(林 2006)。従来、親の性質を表す用語として「母性」や「父性」が用いられてきたが、ジェンダーフリーの概念として「親性」という用語が広がりつつある。大橋ほか(2010)は、「親性」がライフステージとともに発達していくものとして、育児期の親性尺度を作成し、自己への認識と子どもへの認識として整理している(表 1)。

本研究では、親性の要素「自己への認識 - 親

割の状態・親役割以外の状態」と、「子どもへの認識」を促すことを目標としたファミリー・ポートフォリオを構築することを目的とする。

表 1 親性尺度の要素(大橋ほか(2010)より筆者作成)

自己への認識	<p>「親役割の状態」 子どもに接しながら、授乳や排泄の世話といった育児能力を身につけ、育児に関心を持ち親としての役割に満足感を抱いている状態 [親役割の満足感, 育児への関心, 親役割獲得の期待, 育児能力・態度・欲求]</p> <p>「親役割以外の状態」 夫や妻といった役割をもち社会で働く存在認識を示し、自己肯定感や社会との関係性を含む [親として以外の自分への満足感, 自己肯定・自己への欲求, 社会との関係]</p>
子どもへの認識	<p>子どもとの関係を育みながら、子どもの現在と今後の成長・発達の様子の理解を深め、愛情をいっただきながら接している様子 [子どもへの愛着, 子どもの様子の理解, 子どもの成長発達の理解, 子どもとの関係]</p>

3. 設計要件

教育現場で用いられるポートフォリオでは、教育者が教育活動の記録、振り返りを行うだけでなく、学習者自身がさまざまな過程の記録等の蓄積から目標に対する学習を振り返る。家族版ポートフォリオとして本研究で構築するファミリー・ポートフォリオの設計要件を図 1 に示す。容易に活動可能なスマートフォンアプリとして実装し、

- ・データを蓄積していく日常的な活動
- ・蓄積したデータを活用する定期的な活動

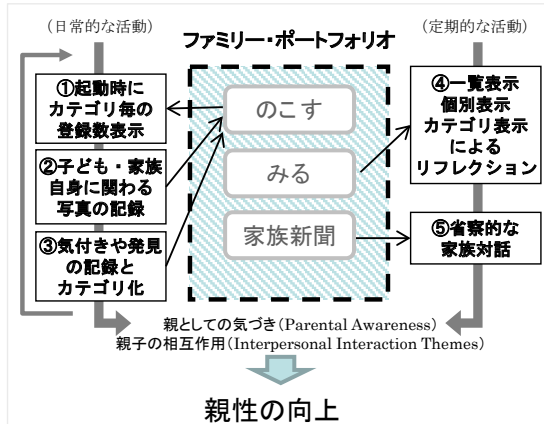


図1:ファミリー・ポートフォリオを用いた省察的な家族対話

から構成される親性向上の機能を装備する。

以下に、本アプリの機能とそれらを用いた活動と期待される効果をまとめる。

- ① アプリ起動時に登録したデータをカテゴリ毎の登録数を表示することで、「親性」の全ての項目に意識を持たせる。カテゴリはデータの「種類」（子ども自身のこと／育児に対する気持ち／自分（親）のこと）と、「評価」（良い・嬉しい・楽しい／反省・次頑張ろう／淋しい・悲しい）から構成される。
- ② ユーザー（子どもや自分、夫等）毎に写真データ（子どもの様子、作品、親に関わること、成長の思い出等）を蓄積していく。
- ③ ②のデータにコメントの記入とカテゴリを付加する。
- ④ 蓄積したデータを一覧表示、個別表示、カテゴリ表示等で閲覧することによるリフレクションを行う。本人だけでなく、子どもや夫婦、家族とともに閲覧することで対話を重ねることを想定している。
- ⑤ 指定期間の新聞を発行する（図2）。表示不可以外のデータから、カテゴリ毎に自動生成される。これらは無線プリンタで印刷できる。新聞を閲覧しながら、親子、祖父母も含めた家族で対話を行うことを想定している。

4. 評価

実際に育児期家族に一定期間使用してもらい、使用前と後に「親性尺度」調査紙に回答してもらい、変化を検討する。変化が大きくみられた家族にインタビューを行い、各機能からどのような活



図2:家族新聞

動が生まれ、機能の効果につながったのかについて質的に検討していく。

謝辞

本研究はJSPS科研費 25350923(代表:佐藤朝美)の助成を受けたものです。

参考文献

- 文部科学省「家庭の教育力の向上」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/katei/1246352.htm(2013.07.17参照)
- 林昭志 (2006) 親を生涯発達の観点から捉える試み:乳幼児期の親の発達について. 上田女子短期大学紀要 29, pp.1-9.
- 大橋幸美, 浅野みどり (2010) 育児期の親性尺度の開発:信頼性と妥当性の検討. 日本看護研究学会雑誌 33(5), pp.45-53.
- SATO,T.,KONO,S.SARAKI,J,SATO,S.(2014) Development of the Smartphone Application “Children’s Own Museum” as an Element of a Family Portfolio. Proceedings of ED-MEDIA 2014. pp.1007 -1011.
- Thomas, R.(1996)Reflective dialogue parent education design: Focus on parent development. Family Relations 45.2,pp189-200.